

# 地方でしごとく

4

南関町の中学校跡地に建つ工場の一室。防じんマスク姿の熟練工が顕微鏡をのぞき込みながら、ダイヤモンド粒子を固めた研磨材を取り付けたペン型の電動工具を右手に持ち、慎重に動かしている。

磨いているのは左手に持った大きな消しゴムほどの金属片。目指すは設計図との誤差2分(千分の2ミ)の加工精度。手先以外は微動だにしない。

東京都大田区に本社がある産業用工具メーカー富士ダイスの熊本製造所。1988年の進出以来、精密な金型や工具をオーダーメイドで作ってきた。

熟練工が磨いていたのは、世界最高の品質を誇る日本の飲料缶生産の決

め手となる精密金型だ。日本製の缶飲料は、開ける時に海外製品のように強くプルタブを引く必要はない。一方で、落としても簡単には破れない。ふた部分を中心に、千分の1ミ単位の加工が施されているからだ。

金型はダイヤモンドに次ぐ硬さを持つ超硬合金製で、飲料用アルミ缶のふたを打ち出す高速プレス機に組み込む。表面に高さがわずか0.4ミほどの山脈状の突起があり、この部分が飲み口部分に押し当てられ、馬蹄形の溝を瞬時に刻む。その微細な突起の曲面を設計図通りに仕上げる最後の研磨作業は今も人の手が頼り。工具を操る坂井紀博さん(43)はこの道22年のベテランだ。「一瞬も気が抜けない。力加減を誤ると素材から作り直しになる」と話す。

の機械科出身。もともと手先は器用だったが、努力を重ね、自分に合う研磨材を探しながら指先の感覚を研ぎ澄ませてきた。「筋力に個人差があり、単純に先輩の手法を



富士ダイス熊本製造所で、ペン型の電動工具を手に製品の研磨作業に当たる熟練工の坂井紀博さん(南関町)

まねても駄目。一人前になるまで10年かかった」富士ダイスは国内で唯一、製缶用の精密金型を素材から一貫生産している。炭化タンクステンなどを配合した金属粉を押し固めて真空状態で焼き、工作機械を使って粗加工。そして最後に規定の加工精度に仕上げる坂井さんのような熟練工の腕が、品質向上に大きな役割を果たしてきた。

坂井さんは「難しい仕事ほど取り組む価値がある。成功時の達成感は大きく、経験も積める」と話す。

人件費などで優位な海外勢との競争で国内製造業の空洞化が叫ばれて久しい。その中で同社は従業員を育て、先端技術を磨くことで生き残りを図る。

熊本製造所は、製缶用の金型で培った精密加工技術を生かし、自動車部品関連などにも手を広げる。従業員は立地以来の過去26年間で3倍の160人に増加。本年度着手予定の工場拡張で、同社最大の生産拠点になる見通しだ。(猿渡将樹)

今年3月まで製造所長

## 富士ダイス熊本製造所 ①

# 生き残りへ 技術に磨き

くまもとの  
**明日**  
KUMAMOTO FUTURE  
第7部

2014・6・11

産業用工具メーカーの富士ダイス(本社・東京)は1988年、製缶用精密金型を製造する横浜工場が手狭になったため、南関町に熊本製造所を構えた。

九州自動車道南関インターに近い交通の便や県などの熱心な誘致が進出の決め手だったが、執行役員が多田隈豊さん(52)＝南関町出身＝は「熊本進出は人材確保の面でプラスだった」と振り返る。熊本製造所は従業員約50人で発足したが、当初は綱渡り状態が続いた。当時、副所長として生産現場を指揮した元常務の柳生和富さん(67)は「横浜工場から来た熟練工数人が入社間もない地元採用の若手20人以上を指導した。同時に自らも生産

に当たらざるを得ず、余裕がなかった」と振り返る。

未熟な若手が多ければ、ミスも出る。納入した金型に不具合があり、取引先の生産ラインが止まる事態も起きた。しかしこの時、若手が休日返上の突貫作業で代替品を作り、取引先への影響を最小限に抑えた。柳生さんは「責任感や熱意を持った人が多かった。その時の地元の若手が成長し、今の熊本製造所などを引っ張っている」と話す。多田隈さんもその1期生だ。

熊本製造所の操業が軌道に乗ると、社内で熊本

県出身者の評判が上がっている。熊本は会社の人材供給基地の側面も持つようになった。全国の社員約千人に占める県出身者の割合も年々高まってきて

いる。熊本製造所は閉校になった南関北中跡にある。工場棟は1988年の進出時に新設したが、事務棟は古い木造校舎を使っ

ている。校長室は社長室、職員室が事務室だ。

こうした経営は、大分県出身で戦後の49年に北九州市で町工場を開いた創業者の新庄鷹義さん(2012年死去)の方が育てた従業員たちだ。

針に基づいている。戦時中、陸軍少佐だった新庄さんは、質実さと同時に「企業究極の目的は利益の追求ではなく、幸せな人を育てることにある」として、雇用や人材育成に重きを置いた。

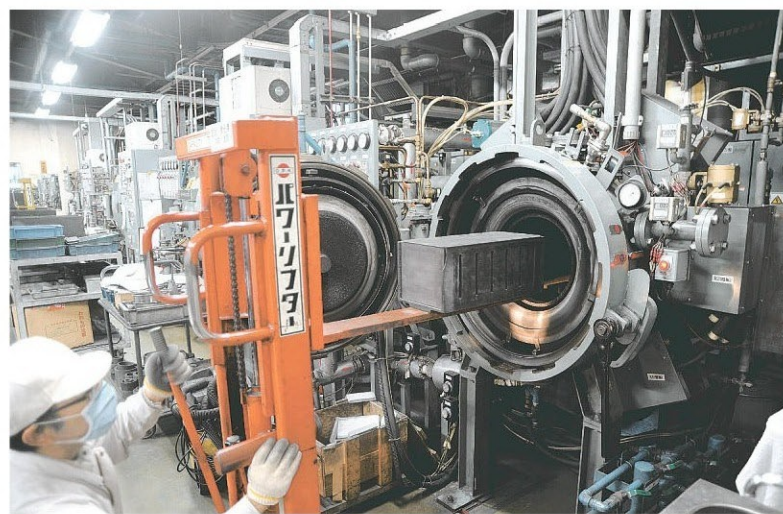
従業員は食堂の調理人も含め正規雇用が中心。職場単位で勉強会を開くほか、独自の資格制度も設けて給与にも反映させてきた。それが結果的に会社の業績につながっている。

金属を穴に通して細く伸ばす線引きダイスの修理・製造から出発した会

社は、自前で素材となる超硬合金の開発に成功して以来、製鋼や製缶、自動車、電機など、日本の主要

製造業の現場を支えてきた。その原動力は、会社が育てた従業員たちだ。材料費数千円の金属粉

が複雑な工程を経て付加価値を付け、物によって数十万円の製品になる。「付加価値は人の手が生み出す。製造業の浮沈は結局、人材次第」と多田隈さん。富士ダイスが南関町に熊本製造所を置き続ける理由の一つだ。(猿渡将樹)



富士ダイス熊本製造所で、真空焼結炉で焼いた素材をケースごと取り出す従業員＝南関町

## 富士ダイス熊本製造所 ①

# 付加価値生む人の手

くまもとの  
**明日**  
KUMAMOTO FUTURE  
第7部

2014・6・12